

## 論 文

# 母 親 面 接 を 考 え る

— 家庭内暴力を起こしたK君の母親との面接事例から —

芳 野 紀 子

## I はじめに

教育相談においては、何らかの症状を呈している本人（子ども）が、来談することを拒否したり、抵抗を示すことが、往々にして起こる。その場合、主として母親が来談し、母親との面接を通じて、子どもの問題の解決を計ろうとすることが多い。

このような場合、相談者は、母親自身が症状を呈している子どもへの対応に悩んでいる一人の人間として認識すること、及び、症状を呈している子どもへ働きかける為の仲介的役割として認識すること、の二重の認識構造を持って対応することになる。つまり、母親面接とは、母親自身をクライアントとして考えることと、クライアントは子どもで、その仲介者として考えるという二重性を常に持ち、しかも、この二つの特性は、分かち難くからみ合っているのである。母子平行面接が行われる場合には、いづらか母親面接の二重性の負担は軽減されるが、子どもが来談せずに母親のみの面接で治療が進められる時、特にこの二重性への対応の問題が重要となる。時には、面接が進むにつれて、母親自身の問題が非常に大きくなり、子どもの問題と一見関係のないような面接に展開していくこともある。このように母親面接は、ケース毎に多様な意味合いを含んでいるものであるが、それは治療者（以下 Th と表記する）が、予見できるものではなく、面接の過程で展開していくもの

なのである。本論文は、母親面接の一事例を取り上げ、クライアントとしての母親の変化を追いながら、母親面接の二重性について考察を試みるものである。

## Ⅱ 事例の概要

母親：43歳。高卒。専業主婦。2児の母親。

主訴：長男（K）の家庭内暴力。Kが物を投げてガラスを破ったり、止めようとする母親や妹を殴るなどの暴力が激しいのでどうしたらよいだろうかとかなり切迫した電話が父親からあった。

家族構成：父親（45歳。会社員）、母親、K（17歳）、長女（6歳）の4人家族。父親は、仕事上海外出張が多かった為、母子のみの状態が4年続いたこともある。

Kの現症歴及び生育歴：正常産。母方では、初孫ということで祖父母に大変可愛がられた。父親が、生後6ヶ月頃に単身で海外赴任した為、一層母方祖父母と密着した生活をした。「我侬で、自分勝手な性格になった」（父親談）。小学校入学後2学期から、父親の出張先（パナマ）へ一年間家族一緒に行ったが、適応上の問題はなかった。勉強は、好きではなかったが、一応の成績をとっており（中の上）、友達もすぐ出来る人なつこい性格である。しかし、落ちつきがなく、忘れ物が多かったり、当番をさぼったり、だらしない所があった。小5の時に妹が生まれたが、可愛がったり手伝ったりした。

中学に入っても勉強は、ほとんどしないので中位であった。部活は、オセロ部から、先生の勧めでバレー部に中1の11月に転部した。それから朝起きられず遅刻、欠席することが少しずつ増えて行った。中1で欠席16日、中2で23日であった。最初の暴力は、中1の冬休みに、祖父母の家へ出掛ける直前に、「妹が自分の食べようと思った菓子を食べちゃった」と怒り、母の財布を取って暴れ、結局祖父母が来て論し、鎮まった（父親海外赴任中）。それ以後「何故起こしてくれなかった」等と怒ったり、面白くないと母に当た

ることがあった。また、中2頃から、友達と集まってマージャンをしたり、煙草も吸っていた。友達は、小学校時代から、同じマンションの仲良しでずっと付き合っており、特別非行グループではないが、順番に友達の家で土日にマージャンをする程度のことを、現在に至るまで続けている。中3になると成績も低下し、「今度は頑張る」と言うがほとんど勉強は手につかず、結果が悪いと落ち込むという状態であった。2学期に入り、朝起きられず遅刻、欠席が増え、結局2ヶ月位全欠席となった。先生の家庭訪問に対しても「明日は行く」と約束するが行けなかった。心配した父親が12月に帰国し、「入試を控えて、頑張った方がよいぞ」と話して聞かせ、以後休みながらも出席し、希望の高校のランクを落し、公立高校に入学した。しかし、高校が、バスで20～40分かかるのが苦痛で、「起きられない」、「めんどくさい」と休み始め、6月には全く行かなくなった。担任の先生が訪ねると「行く」と約束するが、やはり休んでしまうということを繰り返し、結局3月に出席不足で留年と言われた。しかし、Kは、「恥ずかしいから中退したい」との理由で退学した。以後、ほとんど昼夜逆転の生活となり、「人と会いたくないが、お金が欲しい」と、夜のアルバイトを2ヶ月位の周期で変えながらやっていた。また、高校に入ってから、パチンコや競馬もやり始め、中学時代の友達とは、高校は違ってもマージャンの集まりが続いていた。

このような時に予備校の勧誘の電話に出たことをきっかけに、暴れ出したものである。

家族歴：＜母親＞東京生れの東京育ち。父親は大工で仕事に忙しく、あまり構ってもらわなかったが、何でも「いいよ」とやさしかった。兄と弟の3人兄弟の真ん中だったので、「女の子でなければよかった」と思ったこともある。あまり口数の多い方でなく、「しっかり者」と周囲から思われている。

＜父親＞東京多摩地区出身。7人兄弟（生存者男ばかり5人）の末っ子。両親が年取っていたので、自分のことは自分で決めてやって来た。母親と職場で知り合い恋愛結婚。

結婚後、母方の両親宅の近くのアパートに住み、そこでKが生まれた。半

年後、父親が海外出張（6ヶ月）に出たが、母親は、自分の両親に助けられ子育てをした。Kが3歳の時に千葉県内にマンションを購入し引越した。Kが小1の夏パナマへ家族で転居。1年間の海外生活は母子共に楽しいものであった。Kが小5の時、長女誕生。Kが小6の12月父親はインドネシアへ単身赴任（4年間）。父親不在中は、丁度Kが中学生になり、母親も悩みも多かったが、心配かけないようにほとんどKの暴力については、父親に伝えなかった。しかし、中3の2学期に欠席したことで、父親に知らせざるを得なくなり、父親は、急きょ11月に帰国した。

### Ⅲ 面接の経過

約1年半（27セッション）にわたる面接を5期に分けて考察を加える。

#### 第Ⅰ期 面接導入期（第1回～第6回）

最初の面接依頼は、父親が電話で申し込み、大変切迫した状態であったので、2日後に面接が約束された。初回面接は、母親がKの暴力で来られないため、父親が来室した。この時は、現在のKの問題、家族、生育歴についてインテーク面接が行われた。父親は、「長男ということで皆で甘やかしたことがいけなかったと思う。単身赴任で母親任せにしていたのがいけなかったのだろうか」等反省したり、思いあぐねている様子で、時々眼鏡を持ち上げ眼頭を拭くなど、父親の心痛がThにもヒシヒシと伝わって来た。

第2回目から母親が来談したが、スッキリとした着こなし、化粧もきちんとし、寸分の間もない感じをThは受け、「これが暴力に困まっている母親なのだろうか」と違和感を覚えた。母親は、Kが「お金をくれ」と暴れること、暴力がひどいと妹と一緒に家の中に居られず、自動車の中に居て鎮まると言っていると語った。

第3回 大変色鮮やかな服装（赤いブラウス、白のブレザー、紺のスカート）で来室。Kの暴力が鎮まったこと、Kが高校中退を後悔している様子なので、「中退者でも受け入れてくれる高校はありませんか」と問い、父親とどここ

かよい高校はないだろうかと話し合っているとの事であった。

第4回「Kが『お金がない』と言っては要求して来る。あげてもすぐ使ってしまう。どうしたらよいだろうか」と訴えた。一方、今までKに対して「何をするか分からない」と心配していたが、一晩留守番をさせたら、食事等自分でやっていた。「一人でやろうと思えば出来るんですねー」と述懐した。

第5, 6回では、「何も話すことがありません」と開口一番に話した。今までの面接でも自分から次々に話すのではなく、Th が問うと答え、話も途切れがちで Th も面接に対する抵抗の強さを感じていた。そこで面接室を明るくゆったりとしたソファのある部屋に変えてみた。Kの中学時代の暴力について「『絶対に負けない』と思って必死でしたね。『父親のいない分頑張らねば』と思いました。ひどい時は寝てる所に来て寝られない事もありましたが『メソメソできない』って思っていました」と感情を込めて語った。また、「自分自身親には相談せず自分の力で解決して来たように思う。だからKも認めてやらないといけないでしょうね」と述べるが、その一方で「Kが『自分のやりたいようにやらせてくれ』と言うばかりで、高校再受験の話をしようとしてもちっとも聞こうとしない」と話した。

## 第Ⅱ期 Kの肯定的側面への気づきの時期（第7回～第10回）

この時期から母親の方から話が開始され、積極的に面接に関わる姿勢が感じられるようになった。第7回では、車の追突事故に遭い、相談室へも車で来られなくなったこと、道に迷ってしまったと冗談ぽく話し、大分気分が明るくなれたことが感じられた。また、7, 8回と全く化粧気のない顔で来室したのも印象的であった。Kが妹に話しかけたり、母親にも「『マージャンとパチンコとどっちをしようか』等くだらない事を尋ねて来る」と、Kの様子が和んで来たことを喜んでいた。しかし、Kは父親を避けているので、「父親の方から話しかけるようにして欲しい」と父親への不満を述べた。

第8回「Kが『小遣いがなくなった』と暴れたが、『給料日まではあげられない』とキッパリ断わり、どんなに暴れてもダメなことはダメと貫ぬい

た」「またKの暴れ方も以前と比べれば大したことはない」と話した。父親が調べて来た高校のことを話したが『行かないよ』とあっさり断られてしまった。「これ以上言ってもダメだ」と諦めた様子であった。その他、「2、3日前にKが金を盗まれたのに、暴力も振わず何も言わずに我慢していた」とKの変化を語った。

第9回 Kが、母の留守中に湯をポットに入れておいてくれた事などKの変化を嬉しそうに話した。また、偶然道で父親に出会い、「ボン」と肩を叩いて『どこへ行くの?』と聞いて来たと父親が大変喜んでいと話す。また、ThがKの外出先とかタバコをどの位吸うのかとか尋ねると『うるさい、しつこい』と言われるから、Kの様子から察するようにしているとの事であった。

第10回は、昔の思い出話になり、「自分は、やろうと思ったことは頑張る方だった。娘の方が自分に似ている。Kは、全く反対で、すぐイライラして止めちゃう。自分は男の兄弟の中で育ち、兄弟喧嘩をしたことがない。父が大工をしている現場へ友達を連れていったら、すごく叱られた事を覚えている」等と話した。

### 第Ⅲ期 Kへの信頼形成期（第11回～第16回）

第11回 妹が入学する等で来室が難しいからと1ヶ月位休んでいた所、父親から「定時制高校へ行くと言い始めたので、詳しい事を教えて欲しい」と来所の依頼があった。Kが毎日サッカーボールを室内で蹴っていてうるさいので父親が堪り難ねて怒鳴り込んで行ったことから取っ組み合いになった。母親は「やるならやった方がいい。2人とも溜まったものを吐き出させたかも知れない」と思った。次の日にKが「定時制高校が近くにあるか?」と聞いて来た。母親が「定時制は色んな人が来ているし、長くかかるから続けるのが大変だ」と言うとKは「そんなことは分かっているよ」と答え、かなり具体的に色々知っている様子だったとの事であった。

第12回 母親は、足を捻挫し暫く歩けなかった。Kは、「歩き過ぎだよ」と言って、手伝ってくれた。「『入試問題集を買って来てくれ』と言ったの

で、『自分で行けば』と答えたが、『自分じゃ分らない』と言うので、私も分かりませんが、易しそうなのを買って来ました」と笑いながら話す。大検のことも教えようとしたらよく知っていた。この間、又、塾の勧誘の電話がかかって来た時、Kがはっきりと断っていた。「何か一段階上がったような気がする」と語った。

第13回 「Kが『絶対勝つから、競馬に賭けないか』と言うので1万円賭けてしまった」と笑いながら話す。友人に誘われアルバイトも始めることにしたらしい。

第14回 Kが『難しい』と言いながらも受験勉強をボツボツやっている様子で、「やる気が続いている」。夜間高校のパンフレットも本人の希望でもらいに行った。「本人がやる気があると親も行こうという気になるし、あせらずに待とうという気にもなる」。Thが「長い間じっと待つのは大変だったでしょうね」と受けると、「自分の悩みを同じような子を持つ親と支え合えたらと思ったこともあった。外に対して何もないようにして耐えることは大変でした」と涙を浮かべながら話した。

第15回 色々やりたい事がある（簿記、ワープロ、運転免許など）と、夜遅くまでしゃべっていた。「Kの気持ちがよく解るようになって楽しい」。引越のアルバイトを始め、身体を使うので食欲も出て来たし、色々の年齢の人の話を聞いてくるのでよい勉強になっているようだと言った。父親に対しても、『あんなには出来ない』と尊敬している様子がみられること、また、母親自身も「父親によって気持が支えられている」と語った。

第16回 アルバイトを続けてやっていること、今まで行けなかった歯医者へ通うようになったことなど述べ、「今まで寄り道したけれど決心出来て良かった。まだまだスムーズに行くとは期待していないけれど、Kなりに進んでくれればと願っている」。

#### 第Ⅳ期 反省期（第17回～第22回）

第17回（夏休みで2回程休んだ後）9月初旬、Kが外出する時、「食事出来ているから食べて行ったら」と母親が声を掛けたのに対し、怒って全部食

事を引っくり返してしまった。「一体そんなことで何故怒ったのか、新学期だったからだろうか…。夏休み中ずっとアルバイトしていて勉強は手につかなかったらしい」と理由を見出そうとしている様子であった。

第18回 まだ暴力が続いていて、身の危険を感じて逃げることもあると話す。Kは、『俺が怒るのは、お前（母親）が悪いからだ、俺の気持ち分かるか』と迫ってくる。父親に早く帰ってもらっているが、Kは父親へは口の利き方も悪くない。「すごく疲れてしまう」と言いながらも、「Kは発散する所が少ないから、やるとスツとするのでしょうね」と語る。

第19回 暴力はないが口を利かなくなっている。「暴力よりつらい」。Kが、『母親の育て方が押しつけがましかった』等と言ったりする。「Kの排け口になっているのだろう。暫く待つ他ないと思う」。

第20回 自分の部屋からほとんど出て来ない。「何を考えているのか分からない。物を壊していた方がむしろよかったと思う程」と述べる。父親も避けている。『両親は今まで何もしてくれなかった』と思っているらしいが、今まで両親揃って学校に相談に行ったりして来たつもりなのだが…。「『親は、自分の気持ちを分かってくれなきゃいけない』と思っているみたい」。

第21回 『勉強が難しくて出来ない』と思っているのではないか。こうなったのは親のせいだと反抗しているみたい。『もう少し自分でやりなさいよ』って言いたくなる。Kはずっと頑張ってることをしたことがない子だった。「やはりKは変化してはいないのだろうか」。

第22回 色々過去のKとのかかわりについて語り、「干渉されたくないのだろうから、あの子の世界があるだろうと思って、話したくない事は聞こうとしなかった。自分もKのこと人に話したくなかった。話すまでは大変だったけれど一人の友達には話している。「Kのような問題を起こしているのは皆長男だ。親も子育てがよく分からなくて一生懸命だから、まだるっこしく思えるんですね。子どものやらなくちゃいけない事を親がやってるんですね」と語る。

## 第Ⅴ期 受容期（第23回～第27回）



第23回 気がついたらKと話していた。勉強もやっているみたいと嬉しそうに話す。「そんなに黙ってられる筈はないって思っていました。受験する気持ちを失っていないでホッとした」。「小さい事でも出来たことは喜んでやって、細いこと言すぎちゃうと、言われると嫌ですからね。表面は、『今度こそやってよ』ってやって、でもそれ出し過ぎないように、ゆとり持っていたいですね」,「Kと私とお互に気持が分かり合っているところありますね」と肩の力が抜けている。

第24回 願書や受験の手続き、試験の難しさがどの位なのだろうか話す。この頃友達も暇らしくよくマージャンすると話してから「マージャン仲間が来てくれたこと、今考えると本当にKにとってはよかったですね。誘ってくれなかったらまるっきり一人だったでしょうから…」と語った。

第25回 あまり勉強していない、あきらめてるみたい、『受ける他ないよね』とKには言っている。受験さえしてくれればと思っている。今度の学校は家から近いので、遅刻しないで行けるのではないだろうかと思う。

第26回 入試まであと3日。あまり勉強していないが、あせっても仕方ない。願書出しに行った時20歳位の人が来ていた。「色々事情あるのだろうが、そういう人の中で勉強するようになったら大人になるかー」と思う。

第27回 「お陰様で合格しました」と入試から合格通知が来るまでのKと家族の様子を詳しく述べ、「これからが大変。気持ちが変わらないでやって欲しい」とこれから先への期待と不安を語り、「私も働くことが好きだから、仕事を少ししようかと思う」と述べた。Kの進学が決定したので一応終了とした。

## Ⅳ 考 察

### 1. Kの家庭内暴力について

Kが中学入学より母に時々当たるようになり次第にエスカレートした暴力、本面接のきっかけとなった暴力、第17回面接時に報告された暴力の3種の暴

力をKは示したと考えられる。中学時代の暴力は、第2次性徴が始まり様々な変化を驚きと不安、或いは、喜びとの入り混じった、本人にとっても不明瞭な感情を伴った、身体の成長が先行する不安定さに一つの原因が求められる。また、丁度5年生の時に妹が誕生し、小6の時に父親が海外へ赴任した。Kにとっては、頼りの母は妹と密着し、父親不在を補うべく父親行割を取ろうとした為、父親も母親も心理的に不在の状態になったと考えられる。しかも、受験という未体験の人生の転期を迎え、いたたまれない状態になったのであろう。このようなKの心情は全く理解されずに、父親が帰国し厳しく叱られて再登校した。これは外見上は、問題が解決されたかに見えるが、Kの内面では、父親の帰国によりいくら心の中の空洞が塞がったからだと解釈される。Kの父親は、その父（Kの祖父）晩年の子であり、自分の父は、遠く離れた存在であった。従って、Kに対しても、自分の父親イメージと同様遠くから見ている父親であったようだ。仕事も忙しく海外出張も多く、接することの少ない父親であり、「けじめを持て。責任を持て」など格言めいた忠告をする近寄り難い人であった。母親の方は、自分の枠をしっかりとっており、それを崩されることを恐れ、枠がないとやれない人であり、その枠の中に子どもを入れ込もうとするパワーを持った人である。そこでKはそのような母親の枠の中で、動きのとれない自分の気持を暴力によって表現したと考えられる。また、K自身の生き立ちの中で、甘やかされ過保護に扱われ、自分の抑制力が充分に育っていない側面も根底に存在する。

次に主訴となった暴力は、前の暴力の背景を引きずりながらも、新しい局面として高校中退に起因する劣等感が強く刺激されたことで爆発したものである。この中には、高校中退してしまった自己嫌悪とそれを救ってくれなかった両親への怒りが入り混じっている。彼はここで、自分がたった一人であるという孤独感を抱いたと思われ、これが次に起こった父との格闘（第11回）で明確になる。自分の前にはっきり姿の見えなかった父親が、正面から対決して来たことで、彼は恐れおののくと同時に父の存在を確認することが出来た。父を確認できたことは、父からの自立を意味する。彼は初めて自分の間

題を自分で解決するのだと決心し、自分を見詰め直すことが出来たのである。ここで死と再生が行われたと考えてもよいのではないだろうか。

さて、最後の暴力であるが、これは再生の揺らぎと言えよう。再生への道は、決して生易しいものではなく、時には不安にもなり、甘えたくもなる。しかし、母親は、彼の再生を喜ぶばかりで、彼の心の動揺を受け止めてくれない。「ちっとも分かってくれない」という彼の言葉は、それを訴えているのだろう。しかし一度目覚めた再生の心は、失われず、さらに一歩前進するのである。

従って、Kの暴力はどれも暴力としては同じだが、その意味は各々異なり、彼の心の成長の節目を現すものとなっていると考えられる。

## 2. 母親面接の意味について

子どもの問題に対して、子どもと親と並行して面接治療が行われる場合の親面接の意義として、小比木ら（1982）は、以下4つの機能を挙げている。

- ① 子どもの治療を支持する機能
- ② 親役割と患者理解を促進する機能
- ③ 親自身および家族関係に関する問題を助ける機能
- ④ 親の安定を保つための依存対象としての機能

では、子どもが来談しない場合の親面接についてはどう考えられているのだろうか。家族療法の立場からは、問題の個人（IP）は、家族全体の問題の代表であるから、IPを直接治療するのではなく家族システムを変えることで結果的に本人も良くなると考える。荒木ら（1987）の考えによれば、以下4つの機能がある。

- ① 子どもの問題は、両親や家族の問題であるという理解を促進すること。
- ② 家族成員間のコミュニケーションのあり方の歪みを理解させること。
- ③ 新しいコミュニケーションスキルを教示すること。
- ④ 家族成員間のコミュニケーションを肯定的に意味付けること（再構成化）

家族療法では、家族全体の歪みにアプローチしていくのであるが、本事例

のように母親のみが来談する場合、家族療法とみなすことには無理がある。従って上記の機能が全て当てはまるかについては、検討しなければならない。

そこで筆者は〈はじめに〉で述べた如く、母親を一人の苦悩している人間として認識すること（個人特性と呼ぶ）と子どもの仲介者として認識すること（仲介特性と呼ぶ）の二つの側面から、本事例を検討することにする。

＜個人特性について＞第Ⅰ期において母親は、面接場面への抵抗、防衛がかなり強く、また自分の性格も人に弱みを見せたくない所があると述べており、Th は、まず母親との信頼関係を作ることを当面の目標とした。そこで、母親の抑圧している苦痛を共感するばかりでなく、抑圧していることそれ事体の辛さを察知し少しずつ排き出せるように努めた。また、母親の抵抗感の強さは、面接を進めにくくする（－）の側面ばかりでなく、冷静な観察を促進するものとして（＋）の側面もあると考え、Kとの関係を見直すことを試みた。

第Ⅱ期では、母親の洞察の深まりと共に、Kの態度が和らぎ少しずつではあるが好ましい行動が認められるようになった。そこで母親は自らKを肯定的に評価するようになったので、Th もそれを支持し、母親のKへの眼差しの敏感さ、暖かさなど感じたままを伝えるようにした。その中で母親自身の思い出として「自分の尊敬する父親の働く姿を友達に見せようと思って連れて行ったら『危い』と叱られた」エピソードから、母親の中に信頼感が脅かされることへの恐れがあることが、伝わって来た。また、このような表現がなされたことから、Th への信頼が深まって来たことも察せられた。

第Ⅲ期 一層Kの変化が著しいため、母親も快活になった。Kへの信頼が増し、問題が解決して来たように思え、Kの微妙な心の揺れ、屈折した感情を見過ごしていたようである。これは、肯定的態度をリードしたThの責任でもあった。これが第Ⅳ期の反動となって現われるのである。

第Ⅳ期 この時期は、母親が最も苦悩した時期であった。Th は、それを共感し支えるよう努めた。母親は、じっくりと改めて自分、夫、K、妹との関係を見直し、Kの姿をありのままに受け入れようとし、自分の今まで持つ

ていた時間軸も枠組みも崩して行った。

以上の流れをまとめると、個人特性を持つ面接では、一般の個人カウンセリングと同様、今までの母親が、従来の自己の規定した枠組から解放され、より豊かで幅のある人間へと変容して行くと考えられる。このような変容のプロセスは、神経性食思不振症児の母親についても認められている（中村他、1990）。しかも母親自身の心の軌跡は、Kのそれと切り離して考えることは出来ない。母はKに影響を与え、Kは母に影響を与えていた。まさにそれは、家族療法の理論通りである。

＜仲介特性について＞仲介特性を志向する面接として一番明確に位置付けられているのは、ガイダンスである。従って母親面接の中での仲介特性についてガイダンスを参考にして考えることにする。本例では表面的な特質として三種のものが区別された。一つは、治療目標が子どもの問題解決であることで、小比木ら、中村らと一致するところである。例えば、Kの定時制高校入学決定で面接が終結しているのは、この特質に依るものである。第二に、危機状況の対処法を指導することであり、本事例でも暴力、金の要求への対処法が指導された。第三に、必要な情報の提供である。本事例では、定時制高校の入試についての情報が提供された。

このような表面的対応は、一見簡単そうであるが、かなり慎重にされねばならない。それは誰がそれを求め、どの程度に、いつ与えるのが望ましいか等につき適確な判断が要求されるからである（例えば、子どもの要求を曲解していたり、自分の要求と取り替えたりしていることもある）。しかも、具体的には、このような事態は面接のあらゆる場面で出現して来るので、Thは、母親の認知している子どもの姿を認識しつつ、さらに、現実の子どもの心を母親と共に洞察し、不一致があるのかないか、あるとすればどこがどんな風に不一致なのか、何故不一致が生じたのか等を丁寧に吟味することによって、母親の子どもイメージが真実の子の姿に近づくのを援助するのである。すなわち、仲介特性志向の面接の基本的特質は、母親と子どもの真実の姿と見かけの姿を判別し、双方が一致に近づくよう働きかけることなのであ

る。

### 3. ま と め

以上、母親面接の二重性について考察して来たが、小此木らや荒木らの提示した面接の機能は、上記二つの特性（個人特性と仲介特性）の面接の中に分ち難く含まれている。ここでは、むしろ Th の側が面接を進めて行く上での指標を提示したいのだが、一つ明らかになったのは、個人特性を志向する面接が進むにつれ、個人として母親が自由に解放されて来ること、そして、個人としての解放が進む程、子どもの仲介者としての母親役割イメージも変容し、固い枠組を外して行くということである。すなわち、母親面接では、個人特性志向の面接が行われる過程で、仲介志向の面接が重複して出現してくると言えるのである。従って、面接上重要となるのは、受容や共感的理解ばかりでなく、母親の中の子どもイメージを真の子どもの姿に近づけること（仲介特性志向の面接）であり、これが技術的にも大変難しい事と考えられる。いわば、母親面接とは、面接に登場しない子どもの現実のありのままの姿を母親と共に探っていく道程と言えるのかも知れない。

母親面接の重要性、有効性が認められている中で、本論文が、改めて母親面接の意味を考える一助になれば幸いである。

### 文 献

- 荒木 均、山田清恵（1987）本人不在の家族療法、日本的家族療法の模索、家族療法シリーズ、現代のエスプリ244、146～155頁、至文堂。
- 平山 正実（1979）家庭内暴力、子どもの心理② 大原健士郎編、現代のエスプリ別冊107～125頁、至文堂。
- 堀之内高久（1988）家庭内暴力と親子関係、講座家族心理学 3、国谷誠朗編、92～114頁、金子書房。
- 亀口 憲治（1986）家庭内暴力の家族療法、家族療法の理論と実際 1、大原健士郎編、160～175頁、星和書店。
- 中村このゆ、竹内和子、栗田修司、山 愛美（1990）神経性食思不振症者の母親カウンセリング、心理臨床学研究、vol. 8、No. 1 38～47頁。

小野直広（1984）子どもの家庭内暴力と家族関係，心の健康と家族，家族心理学年報 2，  
日本家族心理学研究会編，25～49頁，金子書房。

小此木啓吾，片山登和子，滝口俊子，乾 吉佑（1982） 児童・青春期患者と家族とのか  
かわり一特に並行父母面接の経験から，加藤正明他編，家族精神医学 3，弘文堂。

安田道夫（1981）家庭内暴力，家庭と暴力，現代のエスプリ166，139～158頁，至文堂。